

35

人びとのつながり

■地域のつながり

農業を中心とした伝統的な暮らしは、同じ土地に住む人同士がいろいろな形で協力して成り立っていた。福生市域にも、生活をしていくうえで必要なくつかの地域的なまとまりがあった。

福生村は、加美・長沢・永田・志茂・福生分牛浜地区に、熊川村は、熊川分牛浜・鍋ヶ谷戸・内出・南地区にそれぞれ分かれていた。この地域はムラとよばれ、自治と行政の組織としてまとまり、

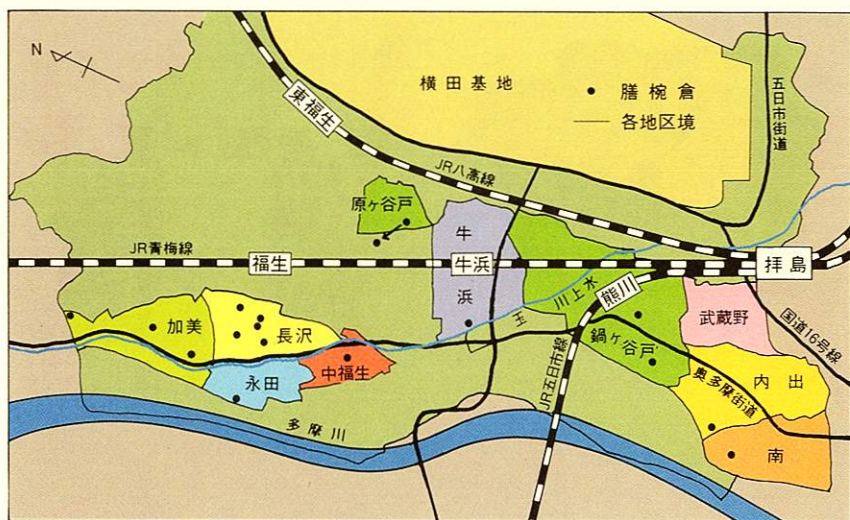
現在の町内会のもとになっている。また、ムラと重なる場合もあるが、それとは別に、同じような地域のまとまりとして庭場にわばとよばれるものがある。これは、江戸時代後期からみられる人びとのつながりで、福生市域での庭場の特徴は、共同で稲荷を祀っていることと、膳ぜん椀わん倉ぐらをもっていることであつた。

■庭場で共有する膳椀倉

膳椀倉とは、婚礼や葬式、法事など、人を招いて行う行事（人寄せという）に使う大人数分の食器や道具をしまつてある倉をいう。地域の人たちが共同で所有していて、道具を借りるときは、倉を管理する当番に決められた使用料を払い、使ったあとは洗つてもとに戻す。使用料はためておいて、修理費や補充費にあてていた。このような方法で膳椀倉を共有するシステムは、多摩地域では江戸末期から行われていた。



復元された膳椀倉（福生市郷土資料室展示室）



膳椀倉の所在地 昭和51年の調査で確認された場所。調査時に現存していなかったものも含まれる。



飯台(はんたい) 祝事の際に赤飯や餅などを入れて近所に配る。



火鉢 冬の庭場の総会の時などに使う。

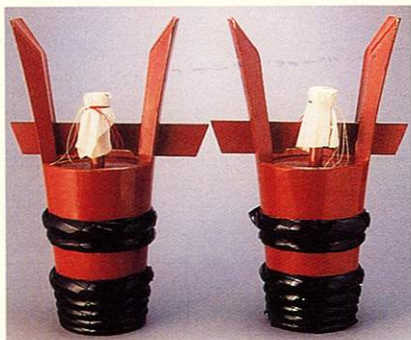
膳椀倉の道具
(福生市郷土資料室蔵)

福生市域では、膳椀倉は庭場単位で使われていた場合が多かった。膳椀倉には、挟箱はさばこ、柳樽やなぎたる、三つ重ね盃(夫婦盃)など、婚礼に使われる道具をはじめ、人寄せ用にたくさんつくるうどんやそばを晒すために使う大半切りや、水切り用の切り溜だめなどの調理道具があった。朱塗りの椀や皿、膳、湯桶、瀬戸物の茶碗、盃、徳利、皿、そば猪口ちよこなどの食器類もたくさん用意されていて、火鉢や座布団、天幕、テーブルをもっているところもあった。

太平洋戦争後になって生活様式が変わり、婚礼が自宅ではなく式場で行われるようになったり、人寄せのときに仕出しの料理を取るようになった昭和四十年代には、膳椀倉はほとんど使われなくなった。



椀類と高膳



柳樽 婚礼や新築祝いのときに酒を入れて贈る。150頁の写真では床の間に飾られている。



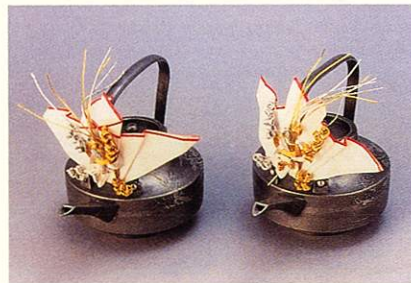
吸い物椀



三つ重ね盃(夫婦盃)と盃台 婚礼で盃を交わすときに使う。



皿類



男蝶女蝶(おちょうめちょう)の銚子 婚礼で盃を交わすときに酒を注ぐ。男蝶女蝶の飾りがついている。

膳椀倉の道具
(福生市郷土資料室蔵)